薩摩塔と碇石

――浙江石材と東アジア海域交流

高 津 孝

1. はじめに

現在、日本には、近代以前の浙江省産石材による石造物が５種存在する。それらは、九州西部の鹿児島県、長崎県、佐賀県、福岡県に分布する中国系石塔の薩摩塔、沖縄県沖縄本島、鹿児島県奄美大島、長崎県、福岡県、山口県に分布する凝灰質砂岩碇石、奈良県奈良市東大寺南大門石獅子、福岡県宗像市宗像大社阿弥陀経石、福岡県福岡市妙楽寺船繋石「唐石」である。これらは、それぞれ別個に日本中世における歴史的史料として研究されてきたが、今回、岩石学的分析、調査を行うことで、これらが浙江省産石材による石造物と認定可能であることが判明し、東シナ海海域交流史に新たな一群の史料を加えることになった[1]。

2. 薩摩塔と梅園石

薩摩塔は、昭和30年代に齋藤彦松氏によって、発見、命名され、当初は鹿児島県内の４基のみが知られていた[2]。その後、鹿児島県のほか、長崎県、佐賀県、福岡県でも発見され、現在では30余基が確認されている（図１）[3]。薩摩塔自体には、年代、由来を示す銘文等は確認されておらず[4]、また、文献による記述も明確なものとしては江戸時代に下るものである[5]。したがって、薩摩塔については、その製作地、製作年代、造立意図など、不明の点が

---

1 本稿の内容は、先行する高津孝・橋口亘 2008、大木公彦他 2009、高津孝他 2010a、高津孝他 2010b、大木公彦他 2010に基づき、その後の調査結果を加えたものである。詳細な参考文献一覧は、上記論文を参照されたい。
高津孝・橋口亘 2008。

2 高津孝・橋口亘 2008。

3 包括的に整理したものに、黒田清光 1974、多田隈豊秋 1978、大石一久 1998、大石一久 1999、井形進 2008a、松田朝由 2008、井形進 2008b、井形進 2010がある。その後の調査も加え、表１を作成した。

4 井形進 2010では、長崎県平戸市志々伎神社中宮の薩摩塔の１基に陰刻銘が存在することを述べているが、銘文は報告されていなかった。井形進 2011では、銘文の拓本を掲載し、その判読結果を示している。判読に因れば、「元□三□□八月□」との紀年があるとされ、日本年号「元亨三年」（1323）との推定が示されている。

5 確実なものとして、「志自岐沖之宮石鉢之圖/沖島全圖　平戸藩蔵」（文政五年［1822］壬午十月、松浦史料博物館所蔵）がある。また、松尾尚哉 2010は、『筑前國続風土記拾遺』（1814年完成）の「大

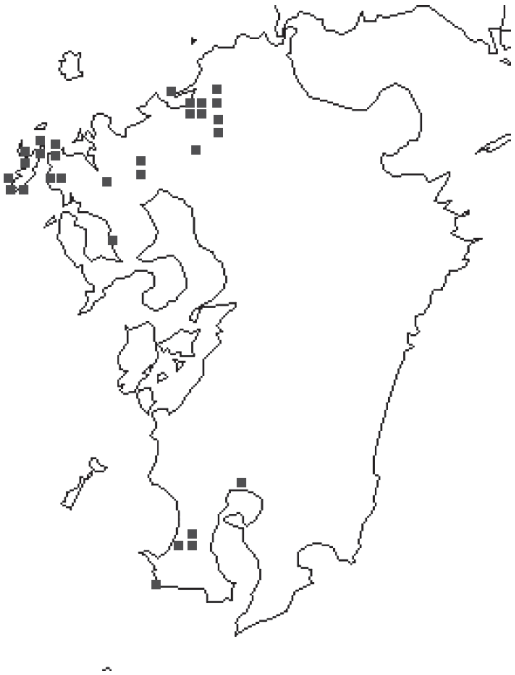

図１　薩摩塔類分布図　CraftMAPの白地図より作成

極めて多い。一方、初期研究段階の昭和30年代以来、その特殊な造形と石質から、中国産石塔である可能性がこれまで度々指摘されてきた[6]。高津孝・橋口亘 2008では、浙江省産石材と坊津薩摩塔石材に対する肉眼及びルーペによる観察（以下、肉眼観察と言う）から、坊津薩摩塔が浙江省産石材「梅園石」によって作成された可能性を指摘した[7]。その後、坊津薩摩塔および大村薩摩塔より採取した石材と中国浙江省寧波産石材「梅園石」に対し、岩石学的分析を行い、三者が同一岩体より採集された石材と認定可能であることが判明した。岩石学的分析とは、岩石薄片に基づく偏光顕微鏡観察、粉末試料に基づく高速Ｘ線回折装置による結晶構造分析、粉砕した砂サイズ粒子に基づく偏光顕微鏡観察、および、岩石薄片に基づくエネルギー分散型Ｘ線マイクロアナライザーによる主成分化学組成分析の４種である[8]。以上の分析から、坊津薩摩塔石材、大村薩摩塔石材、寧波梅園石が、ともに赤味を帯びた明灰色で、粒子の細かい堆積性の塊状凝灰岩であること、構成物質の粒径の違いや岩層の側方および垂直方向への変化が見込まれ、元素の分布パターンからその類似性を論ずることは難しいが、三者の含有する元素は共通していること、さらに、三者は長石のほとんどがＣａを含まない曹長石からアノーソクレースの限られた組成を持つことが判明し、三者が同一岩体から採集されたことを支持するものとなっている。

現在、中国浙江省寧波市には、その郊外の東銭湖周辺に、南宋の史氏一族を中心に多くの墳墓が残されている[9]。これら史氏の墳墓には、墓道の両側に文官、武官、馬、虎、羊の石像が並び、石の椅子や石筍、牌坊を有するものもある。これら石造物の石材に主として使用されたのが、寧波の鄞西地区に産出する梅園石、小渓石（光渓石）である。唐の太和七年（833）に著名な水利施設である它山堰が築かれるが、小渓石が使用されており、鄞

日四天王の石造」という記述を、「宇美八幡宮境内絵図」（1692年と推定される）中の石塔図と併せ、薩摩塔と推定し、絵図の原図は天正14年（1586）以前に遡るとする。

6　注１、注２参照。

7　高津孝・橋口亘 2008参照。

8　大木公彦他 2009、大木公彦他 2010参照。

9　麻承照・謝国旗 2003、楊古城・龔国栄 2006。

図２　坊津薩摩塔

図３　水元神社薩摩塔

西地区石材使用の歴史は長い。梅園石は、主として河湖といった淡水中に沈積して形成された地層を中心とする白亜紀の地層６層中の下から３番目の地層である方岩組地層（寧波盆地西南端の鄞県鳳嶴・鄞江橋から奉化外村一帯に露出）に産出する単層で厚みのある褐灰色凝灰岩であり、小渓石は同地層の泥質粉砂岩、砂岩、砂礫岩中から採掘される薄く均質な層理を有する凝灰質砂岩である[10]。

現在、薩摩塔と確認された石造物は、30余基知られているが、その内２基（坊津薩摩塔、大村薩摩塔）については、岩石学的分析によって浙江省産石材「梅園石」と認定可能と判明、27基については岩石学者による肉眼観察によって浙江省産石材「梅園石」と認定可能と判明した（表１参照）。岩石学的分析および肉眼観察によって梅園石と確認された20基および詳細な報告の存在する太宰府薩摩塔に基づき、橋口亘は、薩摩塔の造形について次のような定義をおこなった（高津孝・橋口亘 2010）。

「屋根（笠）・仏龕・須弥壇（須弥座）の組み合わせを基本構造とし、壺形の龕部の中に本尊となる仏像を浮彫りし、須弥壇の上部に高欄意匠を施し、その下に四天王を浮彫りするタイプの石塔」のグループを「薩摩塔」（狭義の薩摩塔）とする。また、これに仏龕の中を刳り抜き本尊を別造りとする「志々伎神社沖の宮塔」（「類薩摩塔」）を含めた「屋根（笠）・仏龕・須弥壇（須弥座）の組み合わせを基本構造とし、龕部が壺形で、須弥壇の上部に高欄意匠を施し、その下に四天王を浮彫りするタイプの石塔」のグループを「薩摩塔類」（広義の薩摩塔）とする。さらに、これに中国の類似石塔を包括した「屋根（笠）・仏龕・須弥壇（須弥座）の組み合わせを基本構造とするタイプの石塔」のグループを「霊鷲寺型石塔」[11]とし、分類の基本概念とする。

10　浙江省鄞県地方志編委会 1996、寧波市地方志編纂委員会 1995。黄宗羲（1610～95）『四明山志』（康熙12年［1673］定稿、黄宗羲2005所収）巻１「梅園山」の条に「東浙碑材不能得太湖石、次之梅園、質頗近膩。今石孔久閉、佳者亦不易求矣」。清・徐兆昺『四明談助』巻35「梅園山」参照。

11　中国浙江省麗水市霊鷲寺石塔は、南宋嘉定９～11年（1216～18）の紀年銘を有する。『括蒼金石志』巻７「靈鷲山石塔欵識」参照。

表１　薩摩塔類（薩摩塔・類薩摩塔）分布表

	現存地	基調	備考・出典等
	鹿児島県		
1	坊津歴史資料センター輝津館（南さつま市坊津町坊）	四角	（齋藤彦松 1958）
2	水元神社（南九州市川辺町清水）	六角	（毎日新聞社 1961）
3	虎御前の墓（南九州市川辺町神殿）	四角	（川辺町役場 1961）
4	ミュージアム知覧（南九州市知覧町郡）	四角	（毎日新聞社 1961）
5	沢家墓地（霧島市隼人町）	六角	（黒田清光 1974）
	長崎県		
6	志々伎神社沖の宮（平戸市野子町　宮ノ浦）	六角	（多田隈豊秋 1975） 文政５（1822）年「志自伎沖之宮石鉢圖」
7	志々伎神社中宮（平戸市野子町）	六角	（大石一久 1998）
8	志々伎神社中宮（平戸市野子町）	四角	（大石一久 1998）
9	白山比賣神社（平戸市主師町　安満岳山頂付近）	四角	（大石一久 1998）
10	白山比賣神社（平戸市主師町　安満岳山頂付近）	四角	（高津孝他 2010a）
11	館山是興寺跡（平戸市鏡川町）	四角	（大石一久 1998）
12	桜渓書院跡（平戸市戸石川町）	四角	（高津孝他 2010a）
13	里田原歴史民俗資料館（平戸市田平町里免）	四角	（大石一久 1998）
14	里田原歴史民俗資料館（平戸市田平町里免）	四角	（大石一久 1998）
15	龍福寺跡（大村市立福寺町）	六角	（大石一久 1998）
16	下寺観音堂（平戸市田平町下寺免）	不明	（大石一久情報）
17	下寺観音堂（平戸市田平町下寺免）	四角	（大石一久情報）
	佐賀県		
18	黒髪山西光密寺（武雄市山内町大字宮野）	六角	（大石一久 1998）
19	妙覚寺境内（多久市南多久町大字下多久）	四角	（高津孝他 2010a）
20	妙覚寺境内（多久市南多久町大字下多久）	四角	（高津孝他 2010a）
21	背振山霊仙寺跡出土（神埼郡吉野ヶ里町）	四角	（井形進 2010）
	福岡県		
22	首羅山遺跡（久山町大字久原）	四角	（井形進 2008a）
23	首羅山遺跡（久山町大字久原）	四角	（井形進 2008a）
24	太宰府市内個人宅（太宰府市）	四角	（井形進 2008b）
25	宇美町個人宅（糟屋郡宇美町）	四角	（松尾尚哉 2010）
26	火炎塚（福岡市東区志賀島）	四角	（井形進 2010）
27	弓の馬場・茶山会館（福岡市城南区茶山）	六角	（井形進 2010）
28	所在不明（福岡市城南区田島）	四角	（井形進 2010）
29	明光寺（福岡市博多区吉塚）	六角	（井形進情報）
30	馬頭観音堂（福岡市博多区堅粕）	四角	（井形進 2008b）

本表は、高津孝他 2010aの「薩摩塔類（薩摩塔・類薩摩塔）分布表」に基づき、内容を節略し、件数を増補したものである。薩摩塔類には一石造り型のほか寄石造り型のものがみられ、残存状況によっては個体数の把握が困難なケースも多く、本表に示した薩摩塔類の個体数は、今後増加する可能性がある。また、本表には、残存状況などから薩摩塔と断定できないものの、薩摩塔の可能性を有する資料を含む。上記４県の記載順は、発見された時期の早い県順とした。１、15は、岩石学的分析により、寧波産石材梅園石と同一石材であると認定された。2～14、16～27、29～30及び共伴の宋風獅子（6、13、14、22、23）は、肉眼およびルーペ観察により、坊津薩摩塔と同一石材と認定可能とした。28は未調査のため、記述は井形進 2010による。25は、「宝篋印塔」として天本孝志 1977に記述がある。30は「福岡市堅粕町慶學院の墓塔」として島田寅次郎 1933に記述がある。

「薩摩塔類」（広義の薩摩塔）には、六角を基調とするタイプ（六角基調型）と、四角を基調とするタイプ（四角基調型）が確認されており、「類薩摩塔」には六角基調型のみ、「薩摩塔」（狭義の薩摩塔）には六角基調型と四角基調型の両方が確認されている。六角基調型は法量の大きい個体、四角基調型は法量の小さい個体に多い傾向がみられる。また、「薩摩塔類」（広義の薩摩塔）には、頂部を除く、屋根（笠）・仏龕・須弥壇（須弥座）を複数個の石で造るタイプ（寄石造り型）と、同部分を一石で造るタイプ（一石造り型）が確認されており、「類薩摩塔」には寄石造り型のみ、「薩摩塔」（狭義の薩摩塔）には寄石造り型と一石造り型の両方が確認されている。寄石造り型は法量の大きい個体、一石造り型は法量の小さい個体に多い傾向がみられる。

「薩摩塔類」（広義の薩摩塔）には、仏龕の中を刳り抜き本尊の仏像を別造りとするタイプ（本尊別造り型）と、仏龕に本尊を浮彫りするタイプ（本尊浮彫り型）があり、前述の分類概念では、本尊別造り型を「類薩摩塔」、本尊浮彫り型を「薩摩塔」（狭義の薩摩塔）とし、「薩摩塔類」（広義の薩摩塔）のカテゴリに包括した。これまで確認されている本尊別造り型の「類薩摩塔」は、「志々伎神社沖の宮塔」１基のみであるが、「志々伎神社沖の宮塔」は、「薩摩塔類」の中でも最大の法量を誇ることから、本尊別造り型は法量の大きい個体に多いタイプである可能性がある。「志々伎神社沖の宮塔」は、本尊別造り型であるという点や蓮弁意匠を持つ点などが中国浙江省麗水市の霊鷲寺石塔（南宋）等と共通し、中国で確認されている「霊鷲寺型石塔」と日本で確認されている「薩摩塔類」を結ぶ重要な資料である。「四角基調」「一石造り」「本尊浮彫り」の要素が、「薩摩塔類」の小型化に伴うものであるとするならば、「志々伎神社沖の宮塔」が、「薩摩塔類」の中で最大の法量を誇る「六角基調」「寄石造り」「本尊別造り」の石塔である事実から、「志々伎神社沖の宮塔」を古い要素をもつ作例として位置付けることも可能であると考える。

薩摩塔の製作年代については、現在知られている文献的記述が江戸時代にまで下るため、文献に基づく年代判定は困難である。また、日本国内の石造物を中心とした型式論的検討による年代推定も存在するが、薩摩塔石材が浙江産石材と判明したことから、前述した南宋の紀年銘資料である霊鷲寺石塔（1216～18）との類似性も踏まえ、再検討が必要となる。建久7年（1196）、東大寺再建に伴って、中国産石材が輸入され、「中門石獅々、堂内石脇士、同四天王」が製作されたこと[12]、一部の部材が坊津薩摩塔と同じ浙江産石材と判明した宗像大社「阿弥陀経石」[13]が、承久２年（1220）以前に南宋から日本にもたらされたものであること、井形進 2011に示された志々伎神社中宮薩摩塔の陰刻銘紀年の推定なども考慮すると、12世紀から14世紀前半を中心として製作年代を検討すべきように考えられる。ただし、確定的な証拠が存在しない以上、多方面からの総合的検討を必要とする。

薩摩塔の製作場所については、石材が中国浙江産であることから、当然、中国浙江地区が第一に考えられる。前述の造形的観点からも、類似性が指摘される中国浙江省麗水市の霊鷲寺石塔など、中国の石造物と比較して検討を深める必要がある。また、中国産石材が輸入され、日本（九州地方）で製作された可能性も存在する。その場合、東大寺再建時のように、寧波（明州）の石工が日本で製作した可能性や、日本人石工が製作した中国系石

---

12 「東大寺造立供養記」（『群書類従』第24輯釈家部、1960年４月訂正第三版）参照。

13 静永健 2009。

造物である可能性なども考えられる。今後、日本産石材による薩摩塔が発見された場合、少なくとも薩摩塔の一部は日本で製作された可能性が高まる。しかしながら、現段階では、薩摩塔が中国浙江省産石材という素材的共通性を持ちつつ、海を挟んで中国と対面する九州西部を中心に分布している点を重視すると、中国で製作された薩摩塔が船舶によって九州各地にもたらされた可能性が一番高いと考えられる。

薩摩塔の造立主体については、日本に滞在した中国商人、造立地付近を掌握していた日本在地権力であった可能性が考えられるが、推定に止まる。今後、製作年代、宗教的背景とも関連して、分布、伝来の検討が必要であろう。

薩摩塔の造立意図については、前述した南宋の霊鷲寺石塔が先祖に対する供養塔であった[14]という点から、薩摩塔も供養塔であった可能性が考えられる。ただし、日本に将来された後、時代の経過の中でその性格が変化した可能性は否定しない。

3. 碇石

現在のところ、日本で確認された一石型碇石は、70点あり（小川光彦 2008「一石型碇石一覧」及び高津孝他 2010b）、その内、石材についての報告が為されているものが52点ある[15]。この内、凝灰質砂岩の肥後宅碇石（旧秋名碇石）および浙江省方岩組地層に挟在する堆積岩である小渓石に対して、薩摩塔石材、浙江省産梅園石と同様の岩石学的分析を行った。その結果、小渓石が、X線回折の分析結果では石英のみが認められたが、含まれる長石は曹長石と正長石からなり、梅園石に非常に近い組成を持ち、凝灰岩である梅園石と一連の堆積物と考えられ、凝灰岩が再堆積した可能性を否定できない事が判明した。また、肥後宅碇石と小渓石が、偏光顕微鏡観察では酷似していること、肥後宅碇石石材が、X線回折の分析結果で小渓石と同様に石英のみが認められ、含まれる長石は曹長石と正長石からなるが、灰長石も含む点で異なること、両者が岩相、薄片、鉱物、化学組成で類似しており、肥後宅碇石石材が、小渓石の層準に近い方岩組地層の可能性があることが判明した。小川光彦 2008では、一石型碇石は、5種（①角柱対称型、②角柱非対称型、③角柱直方型、④柱状不定形型、⑤柱状型）に分類され、「①角柱対称型、②角柱非対称型、③角柱直方型の定型化した碇石は、おそらく宋代から元代にかけて、外洋を航行した中国のジャンク船に使用されたものであり、『中国スタイル碇石』と認識することができる」とされている。したがって、角柱対称型の肥後宅碇石が小渓石の層準に近い方岩組地層の可能性があることは、小渓石が宋元代に日本と中国の海域交流における中国側の拠点であった明州（寧波）近郊に産出する石材であることを考慮すると、肥後宅碇石が浙江方岩組地層の石材を使用した中国スタイル碇石であるとの推定を支持するものとなる。現在、凝灰質砂岩と確認されている碇石のうち、① 山田グスク跡（沖縄県国頭郡恩納村山田）現存の碇石、② 浜比嘉島浜集落（沖縄県うるま市勝連浜）現存の碇石、③ 平戸市役所碇石（長崎県平戸市）、④ 筥崎宮碇石（福岡県福岡市）、⑤ 承天寺碇石（福岡県福岡市）、⑥ 櫛田

[14] 注11所掲。

[15] 岩石学の専門家の鑑定を経ていない例、文化財保護の観点から試料採集や破断面観察を許可されない例も多く、現在の石材鑑定は暫定的なものが大部分を占める。

表２　浙江石材と認定可能な碇石一覧

	分類	小川仮称	現所在地	石質
1	1	萩大井馬場下碇石	山口県萩市大井馬場下　荒人神社	凝灰質砂岩
2	1	筥崎宮碇石	福岡県福岡市東区箱崎　筥崎宮	凝灰質砂岩
3	1	中央埠頭西浚渫碇石	福岡市埋蔵文化財センター	凝灰質砂岩
4	1	櫛田一号碇石	福岡県福岡市博多区上川端町　櫛田神社	凝灰質砂岩
5	1	承天寺碇石	福岡県福岡市博多区御供所町　承天寺	凝灰質砂岩
6	1	聖福寺碇石	福岡県福岡市博多区御供所町　聖福寺瑞応庵	凝灰質砂岩
7	1	美野島碇石	福岡県福岡市博多区美野島　個人宅　正安４年（1302）銘梵字板碑	凝灰質砂岩
8	1	太宰府松屋碇石	福岡県太宰府市　太宰府天満宮菅公歴史館	砂質泥岩
9	1	相ノ島碇石	福岡県糟屋郡新宮町相島　個人宅	凝灰質砂岩
10	1	唐津神集島碇石	佐賀県唐津市神集島　住吉神社	凝灰質砂岩
11	1	可部島一号碇石	佐賀県唐津市大字加部島　田島神社	凝灰質砂岩
12	1	可部島二号碇石	佐賀県唐津市大字加部島　田島神社	凝灰質砂岩
13	1	平戸市役所碇石	長崎県平戸市岩の上町　平戸市役所前	凝灰質砂岩
14	1	肥後宅碇石	鹿児島県奄美市名瀬幸町	凝灰質砂岩
15	1	山田グスク碇石	沖縄県国頭郡恩納村山田　山田グスク跡	凝灰質砂岩
16	4	浜比嘉島碇石	沖縄県うるま市勝連浜　浜比嘉島浜集落	凝灰質砂岩

表２は、小川光彦 2008の「一石型碇石一覧」に基づき作成した。小川分類の「1」は角柱対称型、「4」は柱状不定形型である。石質認定は、1は谷口宏充博士の報告（上田雄 1976）により、他は大木公彦によるルーペ及び肉眼観察の結果であり、14のみが岩石学的分析を行った結果である。

一号碇石（福岡県福岡市櫛田神社）が大木公彦（岩石学）による肉眼及びルーペ観察により、肥後宅碇石と同質の凝灰質砂岩であると認定され、⑦萩大井馬場下碇石（山口県萩市）が谷口宏充博士の報告（上田雄 1976）によって肥後宅碇石と同質の凝灰質砂岩であると推定されている（表２）。これまでに、我々の研究グループが比較分析、観察を行った碇石は全体のごく一部分（18例）で、今後、浙江産石材の碇石と判明する例は増加すると考えられる[16]。

また、碇石の科学的分析による産地の同定は、既に鈴木和博により行われており、長崎県鷹島海底遺跡花崗岩質碇石が中国福建泉州産（Suzuki, K. et al. 2000）、博多湾志賀島玄武岩質碇石が韓国済州島産（鈴木和博他 2000）と判明している。今後、こうした科学的分析及び共伴遺物の分析が進展することにより、非常に限定的であり、慎重な判断を要求されるが、寧波船、泉州船など、ある程度の船籍の推定が可能になると予想される。

[16] 2011年７月、８月に、大木公彦による北部九州地区碇石についての肉眼観察調査を行った。その過程で、浙江省方岩組地層に由来する石材との同一性が認定可能な碇石が新たに８点確認された。中央埠頭西浚渫碇石（福岡市埋蔵文化財センター）、聖福寺碇石（福岡市博多区御供所町　聖福寺瑞応庵）、美野島碇石（福岡市博多区美野島　正安４年［1302］銘梵字板碑）、太宰府松屋碇石（太宰府天満宮菅公歴史館）、相ノ島碇石（福岡県糟屋郡新宮町相島）、唐津神集島碇石（唐津市神集島　住吉神社）、可部島一号碇石（唐津市大字加部島　田島神社）、可部島二号碇石（唐津市大字加部島　田島神社）である。表２参照。

碇石の残存は、海難によるものが多数を占めると考えられる。現状において、江戸時代の日本における海難について可能な限りの史料を収集し、分析を加えた金指正三 1968によると、以下のごとくである。外国船の海難はその８割以上が漂着事故で、多くは日本近海において遭難し、日本に吹寄せられ、あるいは避難するため漂着したもの、他は日本沿岸において難破あるいは難船、あるいは行方不明となったものである。季節は、太平洋岸については、夏季及び冬季が多く、日本海岸は冬季、九州沿岸では夏季から秋季へかけてが多い。中国船の遭難は、地理的関係から九州地方に多い。多くは東シナ海で遭難漂流してきたもので、夏から秋にかけて多い。薩摩に多いのは、中世末から近世初期にかけて坊津が対外貿易の港として知られたことによって想像される。以上より、貿易による海上交通の多さが海難漂着数に関連していることが示唆される。したがって、現在確認されている浙江石材の碇石分布から、蓋然的ではあるが、宋元期における浙江船の来航範囲が、北は山口県から、九州北岸、西岸を経て、南は、奄美大島、沖縄本島へと達する領域であったことが推定される（図４）。

図４　浙江石材碇石分布図
CraftMAPの白地図より作成

碇石の産地を検討する場合、その碇石を備えた中国商船はどこで建造されたかが問題になる。寄港地での新調など例外的事例はあったにせよ、基本的には船の建造地において碇石は調達されたと考えてよいであろう。したがって、外洋航海船はどこで建造されたのかが、碇石の産地問題を検討する際のポイントとなる。碇石は、明代以降、鉄製の錨に置き換わり、次第に使用されなくなるとされるが、その下限を決定することは難しい。ここでは、東シナ海において中国商船が活発に活動する中国宋元代の状況をまず検討する。

斯波義信 1968では、宋代の公私の造船業の所在地で文献的に確認できるものを列挙しているが、そのうち、沿岸部に関連するものは、以下の通りである。

両浙　温・明・台・越・厳・衢・婺・杭、同澉浦鎮、湖、秀、同華亭県、蘇、同許浦鎮、鎮江、江陰
福建　福、興化、泉、漳、
広南　広、恵、南恩、端、潮
江東　建康、池、徽、太平

また、宋代の運船業の地方的集中という点で（注：『宋会要輯稿』食貨四六水運）、内河漕船に関する官営造船所を11箇所挙げているが、そのうち、沿岸部に属するものは、明州、温州、台州である。技術・人材の集積、物資の入手などの点を考慮すると、これらの地域が外洋航海船の造船地であり、碇石の調達地であった可能性は高い。

また、斯波 1968は、「両浙では、江南デルタおよび浙江流域諸州の造船はたしかに技術

図５　筥崎宮碇石（前、凝灰質砂岩）　春日自衛隊碇石（後、花崗岩）

図６　承天寺碇石

的に進歩し、また運船業者の専業化も進んでいたに相違ないが、造船資材の産業立地からすれば、むしろ明州、温州が好条件を備え、造船規模でもすぐれていた」とし、また、「福建・広南においても泉州・広州等の外港を控えるために、先進的な造船技術を誇」ったが、「広南では……資材の入手に不便であり、……これに対して福建では良質の杉材を豊富に産出し、……また鉄材も豊富で……『漳泉福興化、凡瀕海之民所造舟船、乃自備財力、興販牟利而已』（宋会要刑法二之一三七）」と言うように、宋代においては、造船地としてまず浙江の明州、温州、福建の福州、興化、泉州、漳州を検討対象とすべきであろう。

福建は、花崗岩の産地として有名であり、福州、興化、泉州、漳州も花崗岩地帯に接している。すでに、鷹島海底遺跡より出土した元寇の碇石が泉州産であると科学的鑑定結果がでたように、花崗岩碇石に関しては、まず福建産を検討すべきと考えられる。一方、奄

美大島現存の碇石中に、明州（寧波）産と認定可能な石材が使用されていることが岩石化学的に証明されたことから、赤紫系の凝灰質砂岩については、寧波産を検討すべきと考えられる。温州はかなり複雑で、その近傍に、ジュラ紀のＪ1–2磨石山下亜群、Ｊ2–3磨石山下亜群、白亜紀のＫ1、白亜紀晩期のカリウム長石花崗斑岩の地層があり、今後、具体的な使用石材についての現地調査が必要である。

4. 東大寺石獅子、阿弥陀経石、唐石

建久7年（1196）、東大寺再建に伴って、中国産石材が輸入され、「中門石獅々、堂内石脇士、同四天王」が製作されたことは、よく知られた事実であるが[17]、東大寺南大門に現存する重要文化財の石獅子の石材が寧波産梅園石であることを最初に提起したのは、日本の村上博優師（長野県上田市龍洞院東堂）である（村上博優 1998a、1998b）。師は、早くも1980年代には、東大寺石獅子が梅園石で作られた可能性があるとの説を唱えられていた。その後、2008年８月９日に奈良市で開催された中日石造物研究会主催「東大寺石獅子をめぐる研究集会」において、服部仁 2008は、梅園石の科学分析および東大寺獅子像の肉眼観察に基づき、両者は類似した色調の凝灰岩ではあるが、粒径の差異が存在し、後者には火山礫が含まれることを指摘し、現時点で入手できた梅園石と東大寺石獅子石材の同一性を否定している。さらに、落合清茂 2008も、梅園石と東大寺石獅子石材の類似性の指摘にとどめ、吉田久昭 2008も、梅園石が東大寺石獅子石材である可能性を指摘するのみである。東大寺石獅子石材は、浙江石材であろうと推定されてはいるが確定的ではない。今後、岩石学的分析が行われることが期待される。

福岡県宗像市の宗像大社辺津宮の神宝館に所蔵されている国指定重要文化財「経石　正面阿弥陀如来像　背面阿弥陀経」（阿弥陀経石と略称）は、全体が経石、礎石、蓋石の三部に分かれているが、肉眼観察により、礎石、蓋石について浙江石材梅園石と認定可能と判定された[18]。経石本体は、江戸時代以来、度重なる拓本採取のために墨が全体に付着しており、石材部分の確認が行えなかった。阿弥陀経石には、剥落甚だしきも、「大宋□□□年」と判読できる刻文があり、中国宋代（960～1279）の成立であることは確実で、かつ、確認可能な最古の年号として添刻文中に「承久二年（1220）」という日本年号が刻まれており、宋より日本にもたらされた経石である。したがって、1220年以前に、中国南宋で作成され、日本にもたらされた貴重な文化財といえる 。

妙楽寺（福岡市博多区御供所町）観音堂の石門の笠木「唐石」も肉眼観察によって梅園石と認定可能であることが判明した[19]。妙楽寺唐石には、正面に右から凹刻縦「唐石」、凹刻横「具一切功徳慈眼視衆生福聚海□[無]量是故應頂禮」（『妙法蓮華経』観世音菩薩普門品）、凹刻縦「横嶽蘭陵秀書」裏面に凹刻縦「安政六未九月日/前石城玉堂拝寄」とあり、安政６年（1859）の製作となるが、伝来品を二次的に加工した可能性もある。横嶽蘭陵秀

---

17 『群書類従』第24輯釈家部「東大寺造立供養記」に「建久七年（1196）、中門石獅々、堂内石脇士、同四天像、宋人字六郎等四人造之。若日本國石難造、遣價直於大唐所買來也」。

18 高津孝他 2010a。

19 高津孝他 2010b。

は崇福寺（臨済宗大徳寺派、横岳山勅賜萬年崇福禅寺）の僧で、石城玉堂は妙楽寺の僧と考えられる[20]。妙楽寺（臨済宗大徳寺派、石城山妙楽円満禅寺）は、14世紀前半に、月堂宗規を開山として成立した禅宗寺院。宗規の弟子無我省吾によって築かれた呑碧楼は、海に臨む建物で博多湾を訪れる船の目印になったといい、妙楽寺は中世博多における対外交流の拠点の一つとなっていたが、天正年間（1573～92）に焼失、慶長７年（1602）に現在地に再建された寺院である。

5. おわりに

文献資料は、その特色として権力の所在、動向に密接に関連して残存する。したがって、文献資料に基づいて形成される過去像は、必然的に権力との関係に起因するバイアスを帯びざるをえない。その意味で、非文献資料としての石造物、碇石などはその分布から極めて蓋然的な知識を与えてくれるに過ぎないが、我々が過去像を形成する場合に重要な情報を提供してくれる。宋元期の日本中国の交易が完全に中央権力の掌握下にあったとは考えにくい。日本を目指した中国商船は九州北部から南西諸島にかけてどこにでも到達しうる可能性を有した。到達地で様々な交流、交易が存在してもおかしくない。浙江石材の碇石の分布は宋元期における中国商船の到達可能区域を示唆しており、その中に完全に包摂される薩摩塔分布域はより密接な文化的交流の存在を示唆するものとなっている。中国産石材の日本での展開についての研究は始まったばかりで、今後の調査研究を待たねばならない部分も多いが、東アジア海域交流史にとっての貴重な史料群といえるのである。

引用・参考文献一覧：

天本孝志（1977）『筑前宇美の神々』（葦書房、1977年12月）
井形進（2008a）「白山遺跡の薩摩塔」（『九歴だより』No. 27、九州歴史資料館、2008年4月）
――（2008b）「首羅山遺跡の宋風獅子と薩摩塔」（久山町白山遺跡調査指導委員会・久山町教育委員会編『首羅山遺跡―福岡平野周縁の山岳寺院―』久山町教育委員会、2008年12月）
――（2010）「薩摩塔について」（久山町教育委員会『首羅山遺跡　発掘調査概要報告書』久山町文化財調査報告第15集、2010年３月）
――（2011）「薩摩塔研究概観―新資料の紹介と共に―」（九州古文化研究会『古文化談叢』第65集（4）、2011年７月）
上田雄（1976）「碇石についての研究調査報告」（『海事史研究』27、1976年10月）
小川光彦（2008）「海域アジアの碇石航路誌」（四日市康博編著『モノから見た海域アジア史』九州大学出版会、2008年３月）
大石一久（1998）「中世の石造美術」（『平戸市史　民俗編』、長崎県平戸市、1998年12月）
――（1999）『石が語る中世の社会　長崎県の中世・石造美術』（ろうきんブックレット

[20] 黒田家文書『秘記寺社御用帳』（安政二年･三年）には篤行を賞誉された僧として「博多崇福寺蘭陵」「博多妙楽寺玉堂」の名が挙がっている（『福岡県史』通史編福岡藩文化（上）、1993年）。

９、長崎県労働金庫、1999年１月）
大木公彦他（2009）「薩摩塔石材と中国寧波産の梅園石との岩石学的分析による対比」（鹿児島大学理学部『鹿児島大学理学部紀要』42、2009年）
――（2010）「日本における薩摩塔・碇石の石材と中国寧波産石材の岩石学的特徴に関する一考察」（鹿児島大学『理学部紀要』No. 43、１～15頁、2010年）
落合清茂（2008）「岩石の命名；凝灰岩について―「東大寺石獅子の石材」へのコメント」（中日石造物研究会主催「東大寺石獅子をめぐる研究集会」レジュメ集、2008年8月9日）
川辺町役場（1961）「これも貴重な文化財―神殿虎御前の墓―」（『広報かわなべ』１月号〔第39号〕、川辺町役場、1961年１月）
金指正三（1968）「江戸時代の海難について」（『海事史研究』10、1968年４月）
黒田清光（1974）「解説　南九州の石塔について」（『川内市史　石塔編』、鹿児島県川内市、1974年）
黄宗羲（2005）『黄宗羲全集』（沈善洪主編、浙江古籍出版社, 2005年１月）
齋藤彦松（1958）『造形史学手記』第十九冊（南九州市教育委員会所蔵）
静永健（2009）「阿弥陀経石の航路」（東アジア地域間交流研究会編『から船往来―日本を育てたひと・ふね・まち・こころ』中国書店、2009年６月）
斯波義信（1968）『宋代商業史研究』（風間書房、1968年２月）
島田寅次郎（1933）「筑前に於ける鎌倉時代の遺蹟遺物について」（福岡縣『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第８冊史蹟之部、1933年３月）
Suzuki, K. et al.（2000）, Provenance of Granitic Anchor Stones Recovered from the Takashima Submerged Site: An Approach Using the CHIME Method for Dating of Zircons. Proc. Japan Acad., 76, 139～144.
鈴木和博他（2000）「博多湾、志賀島で発見された玄武岩質碇石の産地」（『名古屋大学博物館報告』16、2000年）
浙江省鄞県地方志編委会（1996『鄞県志』（中華書局、1996年９月）
高津孝・橋口亘（2008）「薩摩塔小考」（『南日本文化財研究』No. ７、『南日本文化財研究』刊行会、2008年５月）
高津孝他（2010a）「薩摩塔研究―中国産石材による中国系石造物という視点から」（『鹿大史学』57、2010年２月）
――（2010b）「南西諸島現存碇石の産地についての一考察」（鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』72、2010年７月）
多田隈豊秋（1975）『九州の石塔』上巻（西日本文化協会、1975年）
寧波市地方志編纂委員会（1995）『寧波市史』（中華書局、1995年10月）
服部仁（2008）「東大寺石獅子の石材について」（中日石造物研究会主催「東大寺石獅子をめぐる研究集会」レジュメ集、2008年８月９日）
毎日新聞社（1961）「薩摩塔の名で町文化財に　川辺町の三つの特殊仏塔」（『毎日新聞』鹿児島版、1961年11月20日朝刊）
麻承照・謝国旗（2003）『東銭湖石刻』（中国文聯出版社、2003年９月）
松尾尚哉（2010）「宇美町所在の薩摩塔について」（福岡大学考古学研究室『還暦、還暦？還暦！―武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集』2010年３月）

松田朝由（2008）「鹿児島県の薩摩塔」（『南日本文化財研究』No. 7、『南日本文化財研究』刊行会、2008年５月）
村上博優（1998a）『江南雲遊求法地資料』（上下）（龍洞院、1998年３月）
――（1998b）『補稿　日中文化交往歴史年表』（龍洞院、1998年３月）
吉田久昭（2008）「東大寺の石獅子の石材と近畿地方の類似岩石」（中日石造物研究会主催「東大寺石獅子をめぐる研究集会」レジュメ集、2008年８月９日）
楊古城・龔国栄（2006）『南宋石雕』（寧波出版社、2006年12月）
「志自岐沖之宮石鉢之圖/沖島全圖　平戸藩蔵」（文政五年（1822）壬午十月、松浦史料博物館所蔵）
「東大寺造立供養記」（『群書類従』第24輯釈家部、1960年４月訂正第三版）
「靈鷲山石塔欵識」（清･李遇孫撰『括蒼金石志』巻７、『石刻史料新編』新文豊出版公司、1977年、第一輯地方類所収）

付記：

なお、本稿は、基本的に2010年までの研究成果に基づいて記述されている。これ以降の研究成果については、高津孝・橋口亘・大木公彦「薩摩塔研究（続）―その現状と問題点」（『鹿大史学』59号、2012年２月）を参照されたい。